教育講演

家族のきずな—夫立会い出産

遠藤 俊子（京都橘大学　副学長・看護研究科長）

［司会］菅 佐和子　（京都橘大学健康科学部）
三田村 啓子　（京都医健専門学校）

「出産」人類の歴史とともに繰り返されてきた事象であり，これまでも様々な立場からの研究対象となってきた。私は，これまでの助産を専門とする看護学の立場から出産が女性，パートナー，子ども，そして家族にどのような意味をもち，支援にあたるものとしての考えてみる機会を本日頂いた。

わが国の出産の場は，自宅から医療施設へと 1960 年を境に逆転した。この背景には，日本の経済成長を迎え，産業構造の変化や人口の都市への集中化によるものであった。第 1 次ベビーブーム期は家庭の中で出産は行われていたが，第 2 ベビーブーム期は，病院・診療所といった施設内では，母子の安全を徹底した医学的管理分娩へと移行していった。その結果，世界に誇る周産期医療体制を築いてきた，このような出産の変化は，産まされるお産として，1979 年の朝日新聞記者の藤田氏の「お産革命」として連載されたことが，広く人々にお産のあり方を考えさせる機会になった。

こうした状況の中で，自然出産法としてラマーズ法が普及し始めた。ラマーズ法は，フランス人産科医師 Fernand　Lamaze がパブロフの条件反射理論から考案した精神予防性無痛分娩から発展させた。女性が出産について何も知らないことが恐怖心を生み，それが緊張を引き出し，痛みを増幅させ身体を強張らせ，お産を大変なものにさせる。出産の経過を教え，呼吸法とリラックス法を習得することで安産にするということである。同時に，出産準備教育や，出産時に産婦と一緒に伴奏する存在の効果についても言及された。

この時期から「夫立ち会い」について始まったとされるが，当初は手術室に準ずる分娩室環境は感染予防や安全性のためにガウン･マスクの着用や，夫の出産への準備教育が行われていることなどの条件などが多く，夫の緊張感も高いものであった。

その後，40 年が経過した。医療改革が進み，患者参加型が当たり前の時代になってきたこと，少子化の進行により国家的政策として「健やか親子 21」により，子どもを産み育てる支援をしているが大きく影響している。また，雑誌やメディアによって拡がるブーム，陣痛 Labor，分娩 Delivery と産後 Recovery も同室で過ごす LDR 室など場・空間の改革，院内助産等の変化が，今や，夫や家族の立ち会いが全体の 60-70%という状況を作り出してきているといえよう。しかしながら，出産する女性とパートナーであり，父親になる男性にどのような効果があるのか，これまでの研究を概観しながら，考察してみたい。

【講師略歴】

1973 年東京都立広尾看護専門学校,1976 年東京都立公衆衛生看護専門学校助産学科卒業し,助産師･看護師として都立病院,山梨医科大学医学部附属病院勤務した。1996 年北里大学大学院看護学研究科修士課程修士(看護学)，2002 年同医療系研究科博士課程修了(博士(医科学)し，母性看護学・助産学を専門として，山梨県立看護大学看護学部教授，山梨医科大学医学工学総合研究部の教授を経て，京都橘大学看護学部教授，同大学院看護学研究科教授として現在に至る。この間，日本看護協会助産師職能理事や日本母性衛生学会，日本母性看護学会の理事などの役職を兼ね，厚生労働科学研究の成果から院内助産システムの提言や助産外来の仕組みの創設・普及を果たした。また，母性看護学・助産学関連の看護系の主要テキストである医学書院や日本看護協会出版会等での著書や論文等多数。